

えりも地域ゼニガタアザラシのモニタリング方法に係る作業部会
(モニタリング作業部会) の検討状況報告

○開催状況

第1回作業部会：平成30年 5月12日

第2回作業部会：平成30年11月30日

○参加委員

松田裕之教授（横浜国立大学）、小林万里教授（東京農業大学）、北門利英教授（東京海洋大学）、三谷曜子准教授（北海道大学）、山村織生准教授（北海道大学）

○検討内容

1) 管理計画延長にかかるモニタリング対応について

管理計画の期間延長（1年間）	現行管理計画期間内におけるサケ定置網漁業の不振により被害防除事業の効果を評価しにくいことから、管理計画期間を1年間延長し、データの整理、パラメータの検証及びシミュレーションモデルの検討を行う。
----------------	--

2) 現在のモニタリング方法について

データ精査	過去（H23年（2011年）以降）の捕獲・混獲データを精査。
年齢査定	（少なくともH30年（2018年）までは）回収した全個体について歯腔等により年齢を査定。H31年（2019年）以降は結果を踏まえて、成長曲線等を用いた手法による年齢査定移行を検討。
混獲数	カレイ刺し網等の実施時期等を確認し、漁業者アンケートと東京農業大の回収データを突合せ、春と秋の混獲にわけて整理（確実に回収された数値を優先）。
調査頻度等の影響	調査頻度の低下による上陸確認数への影響を補完するため、ドローンを用いた空中撮影による個体数カウントを実施し制度検証を行う。
上陸割合	現在の上陸割合は幼獣に偏った調査結果から算出されており、生息数が過大評価されている可能性がある。幼獣と亜成獣に分けて上陸割合を再度算出するとともに、定期的に（極力、成獣を含めた）放獣個体を確保し、上陸割合を調査すべき。
個体群動態モデル	各種データの精査を行い、可能な限り早期に新たなモデルを検討する。
データの反映	上記データの反映はH30年度末までにすべてが完了しないが、反映できるデータにより新たな捕獲シミュレーションを行い、暫定版の実施計画として取り扱う。